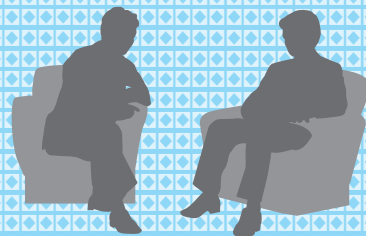


専門技術者 インタビュー



品質管理者として良品を提供する



自身の業務を振り返る小松さん

第20回は、小松秀之氏（株式会社やまびこ）を紹介する。長年にわたり発電機等の品質管理の現場に従事してこられた小松さんに、これまでの業務を振り返って頂いた。

1. 成長の土台は「何でも屋」だったから

小松さんは昭和55年、25才の時に株式会社やまびこの前身である、新ダイワ工業株式会社の広島芸北工場開設に合わせて中途入社した。製造ラインにおける発電機の固定子や回転子の組立業務からのスタートであった。

組立業務に2年従事した後、生産技術と品質管理を兼ねた業務を命ぜられる。当時の工場の従業員数は30数名ほど。業務内容をこう語る。

「製造ラインの改修を行う一方で、部品の不具合があれば飛んでいき代替品を調達したり、在庫部品の棚卸しなどもやりました。言わば何でも屋。所帯が小さかったこともあります。与えられたことは全てやったことが成長の土台になりました。」

昭和59年、品質管理業務が独立した部門となり、小松さんは品質管理課に所属となった。昭和61年には内発協の自家用発電設備専門技術者資格を取得。発電機の性能試験や計測器の校正基準作り等に従事することとなる。

2. 主力商品の品質管理担当として

小松さんが品質管理課に配属されてから10年後の平成6年、可搬形発電装置の市場拡大を睨み、4サイクルディーゼル機関の発電装置の製品化が検討されていた。合わせて発電体やボンネット（外郭）、塗装等の内製化も計画が進められていた。

平成7年、可搬形発電装置の開発プロジェクトが始動し、小松さんは性能試験担当として選任される。開発担当者と共に、性能試験の実施やデータの取り纏め、検査書類の作成を担う。40才の時であった。

「それまでバンドソーやガソリン溶接機の立上げにも関わりましたが、特に社運を賭けた事業でしたので、成功させるために他部門の業務にも積極的に口出ししていましたよ。」と笑う。

平成8年、関係者の努力が実り、ディーゼル発電装置DG250MI（25kVA）が完成、同社の新たな主力商品となる。その後も改良が続けられ、後継機種として、単相と三相電源を同時に使えるDGM（マルチ）シリーズを平成18年に発売、現在に至っている。



三相・単相3線同時出力可能
DGM（マルチ）シリーズ

その後小松さんは、品質管理課主任として産業機械部門全般の製品試験・検査書類の作成を任されることとなる。部品の内製化計画についても進展し、平成10年にボンネットを、平成19年には発電体の内製化をそれぞれ完了。小松さんも生産技術の経験を活かし、平成24年には塗装ライン内製化の工程技術も担った。

3. 品質管理は三現主義が基本

平成24年からは広島事業所の品質管理課長となり、切断機や洗浄機も含めた産業機械全ての製品の品質管理責任者となる。

近年ではベトナム工場における発電体製造の立ち上げ業務でホーチミンと広島を何度も往復し、日本と同水準の品質を確保するため、製造工程の検討や現地従業員への指導を行った。

「夏は雨期の影響で高湿度のため、当初は絶縁抵抗試験を行っても規定値が出なかったり、試験機自体が故障したりと…。錆が発生し易いのでその対策基準も求められました。工場の停電もありました。その際は当社製の非常用発電設備が活躍しましたが」と苦笑する。

他にも中国深センや台湾にて電子部品調達のため奔走したことが印象に残っているという。

小松さんは品質管理者として、三現主義を行動指針としてきた。部品調達先も必ず訪問し、自分の目で製造工程をチェックし、取引に値する会社か判断するという。部品の不具合が発生した際も、取引先の製造工程を双方でチェックしながら、原因を発見し対策を確認するよう心掛けている。

「得てして、取引先を呼びつけ改善書の提出を求めるだけで終わりがちですが、まずは『相手の土俵に上がる』ことが大事。手間暇を掛けてやらなきゃ調達先の品質は向上していかない部分はある。海外は特にそう。現地指導が大事です。」



ベトナム工場にて（平成26年）

また、実際に小松さん自身自社製品を購入し使い勝手や操作性などの品質を直接感じ取っている。

「携帯発電機や草刈機などは日頃からユーザーの一人として使用しています。ユーザーの立場での改善点の把握に心掛けていますね。」

4. 楽しむつもりでチャレンジして欲しい

同社の主力製品である可搬型発電装置の保守・整備にて、特に留意すべき点を小松さんにお聞きした処、エンジンオイルのメンテナンスの件を挙げられた。

「オイル及びオイルフィルタの定期的な交換が整備の基本だと思います。排ガス規制の強化に伴い、オイルへの負担は益々顕著に表れるので、当社の製品で言えば取扱説明書に従い推奨基準にて是非とも交換して頂きたいです。」

現在、売上高1,133億円、従業員3,000名を要する企業に成長した同社。小松さんも35年以上にわたって品質管理の第一線で活躍されてきたが、今後は後進の育成が一番の課題と語る。

「若い社員の方には、仕事を楽しむつもりで新しいことにチャレンジして欲しいね。若い方がむしろ保守的になっているきらいがある。新しいことをやる機会って会社が大きくなり成熟するほど少なくなるので、チャンスと捉えて仕事をして欲しい。」

「品質管理に長年携わってきた者として、これからも構想設計、製品審査、生産移行などの節目節目にて、品質管理の重要性をユーザー目線を見据えながら説いていきたい」と語る姿には、安定生産・安定品質を目指す小松さんのブレない姿勢が伝わった。